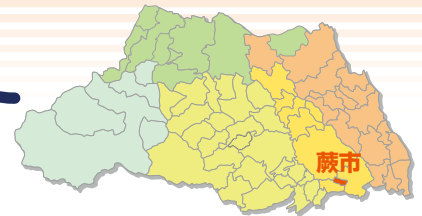




県内首長インタビュー③

蕨市 頼高 英雄 市長(52歳)



今年6月、市長3期目を迎えた頼高市長

■地域・住民一体による「オール蕨」体制

日本一面積が小さく、日本一人口密度の高い市として全国的にも有名な蕨市。わずか5.11km²の面積の中に、文化や歴史がギュッと詰まった蕨市は、商業施設や公共施設も充実しています。また、小さくて過密なだけに、住民同士のコミュニケーションも活発で、安全で安心して住める暮らしやすいまちとしての評価も高いです。都内へは、JR京浜東北線で3駅、都心部へも30分足らずというアクセスの便利さから、都内への通勤率は40%近く、東京のベッドタウンとしての側面も併せ持っています。

蕨市は、1988年に全国で初の「まちづくり条例」を制定し、地域住民が直接参加できる生活者の視点に立ったまちづくりを進めています。市内では条例が制定される以前から市民活動が盛んで、住民参加意識が地域に定着しています。1971年に策定した「総合振興計画」では、地域のコミュニティづくりの推進が定められ、市



中山道沿いでは、さまざまなイベントが開催され、多くの人で賑わいます。

内5地区の地域コミュニティが形成され、住民参加の活発なまちづくりが展開されてきました。

今年6月に就任3期目をスタートさせた頼高市長は、8年前の初就任年に Manifesto 「あったかプラン」を打ち出し、1期目は95%、2期目は100%という高い達成率を上げてきました。3期目も6分野37項目から成る「あったかプラン第3章」において、「①安全で安心できるまち蕨 ②にぎわいあふれる元気なまち蕨 ③みんなにあたたかく、だれもが住みやすいまち蕨」の3つのビジョンを掲げています。参加意識の高い市民と力を合わせた「オール蕨」の体制で、「あったか市政」実現のために全力で推進しています。

■歴史が息づく、まちの魅力

蕨市は江戸時代より中山道の日本橋から板橋に続く2つ目の宿場町「蕨宿」として栄えてきました。現在も街道沿いには旧家や蔵など、当時の面影を残す町並みが残っています。市内にある歴史民俗資料館には、江戸時代から昭和にかけての町並みや生活の様子が展示されていますが、蕨宿は浦和宿や大宮宿以上の規模であったとされ、その大きさを知ることができます。中山道沿いには、苗木市や宿場まつりなど、多くのイベントが開催され、まちの賑いとなっています。

蕨市の概要

人口(H27年埼玉県(市)別人口調査)	72,288人
世帯数(同上)	36,003世帯
平均年齢(同上)	44.8歳
生産年齢人口比率(同上)	66.5%
面積(H26年全国都道府県市区町村別面積調)	5.11km ²
名目市内総生産(H24年度市町村民経済計算)	1,863億3,500万円
製造品出荷額等(H24年経済センサス)	1,219億760万円
事業所数(同上)	2,750事業所

また、国民の祝日として定着し、全国各地で恒例の行事となっている「成人式」も、ここ蕨が発祥の地です。終戦翌年の1946年11月に、戦後、虚脱状態だった若者を激励しようと当時の蕨町の青年団が「青年祭」を企画しました。その後、青年祭のプログラムのひとつとして行われた「成年式」が全国に広まり、1948年に公布・施行された祝日法により、1949年から「成人の日」が制定されました。蕨市では現在も「成年式」の名称で親しまれ開催されています。

■地域の資源を全国に発信

蕨市では、江戸時代後期から綿織物のまちとして栄えてきた歴史を持ちます。蕨の機織りの先覚者で「はた神様」と呼ばれる高橋新五郎が考案した「青縞」が江戸で評判を呼び、さらに明治時代に入ると、2本の洋糸をよって織られた織物「双子織」を始めたところ、蕨の織物業は飛躍的に発展しました。

当時は蕨を中心に、現在の川口市やさいたま市などの近隣地域にも織物業が広がり、その生産は1950年代まで続いていました。60回以上も続き、毎年多くの人で賑わう夏の「機まつり」は、7月7日に織物業者が商売の繁栄を祈って開かれた式典が起源となっています。幻の織物になってしまった双子織ですが、現在は財布や名刺入れ、バッグなどの現代仕様で発売されている他、その魅力を全

国にPRしようと、昨年、マスコットキャラクター「ふたこ」が誕生しました。

また、蕨市では「わらびりんご」を用いたまちづくりにも力を入れています。市内の農家の故・吉澤正一さんが約



双子織

シンプルで丈夫、飽きのこないデザインの子織は、彩の国優良ブランドにも指定されています。



わらびりんご

4月になると花を咲かせ、6月の雨期には収穫ができる、極早生種の蕨市のオリジナルりんご。



わらびりんごの酸味を活かしたサイダーは大好評。

20年の研究開発をかけて、梅雨の時期に収穫される日本一の極早生種を誕生させました。わらびりんごは、小ぶりで酸味が強いため、ジュースやジャム、デザートなどの加工品に適しています。今年の機まつりでは、「わらびりんごサイダー」として1,500本が限定販売され、即完売となるなど、人気を博しました。

■にぎわいあふれるコンパクトシティを目指して

近年の地方都市において、近郊の大型ショッピングセンターの進出により、まち中の商店街の利用が減少し、商店街機能が低下することが課題となっています。これは蕨市も同様ですが、さらに蕨市では近隣の市と比べて工場用地が少ないため、企業誘致や土地利用転換による大型集合住宅の開発などの影響がなかったことで、都市としての新陳代謝や活力創出が課題となっています。

そこで蕨市は、日本一のコンパクトシティとしての都市活力の持続性確保を目指した「中心市街地活性化基本計画」を立案し、県では川越市に次いで2市目となる内閣総理大臣の認定を受けました。計画の進捗状況の把握と進行管理を行うために、「①空き店舗・低未利用地の件数の減少 ②休日の歩行者・自転車通行量の増加 ③歴史民俗資料館の来館者数の増加 ④市民意識調査における満足率の増加」という具体的な4つの数値指標を設定しています。計画の推進体制としては、蕨商工会議所と蕨市にぎわいまちづくり連合会が共同で中心市街地活性化協議会を設置し、団体や事業者などとも協力して、今後5年間、市一丸となって取り組んでいく予定です。



中央地区にある歴史民俗資料館では、蕨宿の模型や機織り機などの常設展示以外に、特別展なども開かれています。また、明治時代に織物買継商の家を分館として公開しています。